「宮城県の平均点は全国で下位」「宮城県の子どもは全国平均と比べると運動能力が低いです」「宮城県の子どもは‥‥‥」こういうニュースを見るたびに、私は震災を思い出します。

あの日、職場のテレビで見た自宅近く（仙台空港）に津波が押し寄せる映像。それを見て焦燥感に襲われ、家族を探して車を走らせ続け、いるかもしれない場所を探し続けた記憶。すべての当てが外れ、日が暮れても一向に連絡がつかず、途方に暮れ、心が折れかけていたときに届いた妻からのメール。

ようやく夜中に再会を果たし、子どもが後部座席で飛び跳ねて遊んでいる無邪気な笑顔を見たとき、体中の血液が沸騰するような感覚に陥りました。そしてこの上ない幸せが自分のすべてを包み込むと同時に、子どもに対し、「生きてさえいてくれれば、それだけでいい。」という言葉が心に刻まれました。

おそらくは、自分自身の人生観が圧倒的に変わった瞬間。そしてこの思いは、震災によって死という言葉が眼前に迫った多くの方々が心に刻んだ感覚なのだろうと想像します。

もちろん、私は凡人ですから、その後、子どもが代表として選ばれたと聞けば嬉しく、試合に出られなかったと聞けば心が痛み、友達関係で悩んでいると聞けば、何もできない自分に腹も立ちました。
しかし、心の中心からは常に「生きてさえいてくれれば」という言葉が聞こえます。できるだけ子どもの歩みに親の気ままやわがままが入らないように、常に心の中心にその言葉を置いてきました。
「優れていようが劣っていようが、人生の核はそこではない。精一杯歩んでくれていることが大事。」

同じ震災の苦しみを分かち合ったはずの宮城県のマスコミが、どういった考えをもってこういう「平均よりも上か下か」といった視点で報道をするのか、私にはその意図は分かりません。震災以降、自然の力の前では人間がいかに脆く、いかに今の生活が儚いかを知り、大自然への畏敬の念を持てば持つほどに、生きていくことの素晴らしさ、生命の重み、その計り知れない価値を感じます。私にとって大事なのは、自分の子どもが生きていることであり、一歩一歩人生を精一杯歩んでいること。前進と後退を繰り返し、自分の力を１００％発揮しようと頑張ろうとしていること。

令和になり、学校教育もようやくその方向が示されるようになってきています。「個別最適」という言葉に表現されているように、「その子その子の歩みに沿った適正な支援」に努める、ということを重んじています。このことは「平均」や「偏差値」によらない、「生きていく力を身に付けさせること」を意味していると私は考えます。

宮城県は大自然の猛威にさらされ続けてきた地域。この唐桑も、リアス海岸の荘厳な景観、大自然から受ける芳醇な恵みとともに、古くから何度も津波の被害に遭い続けてきたと文献に記してあります。まさに「全国平均よりも飛び抜けて高く、『生きていく価値』と向き合ってきた地域」と言えるはず。

伝承されてきた文化やこれまでお世話になってきた方々、保護者の皆様からうかがうご意向は、どれも人間が生きていく上で基本に忠実で誠実なもの。歴史を重んじつつ、相手の意向を尊重しつつ子どもの未来も描く。どのような困難が来ようとも泰然と受け止め、その現実を受け入れる覚悟をもち、相手がどのような考えであってもまずは受容しようとしてくださる懐の深さを感じ続けてきました。

私ごときが人生で得た考え方や教訓は、とうの昔から地域自体が知っており、この地で暮らしていく覚悟、喜び、諦観といった崇高な精神を感じます。

思えば、どんなに学力の高い学校に進学しようが、中学校卒業後すぐに就職しようが、大切なのはやはり「精一杯生きていくこと」であり、「相手を思いやる人間関係」であり、「その集団の中で真摯に取り組む姿勢」であると思います。私が本校の生徒たちに求めてきた姿はまさに「唐桑の地域の皆さんの姿であった」と気付くのです。

今年は特に、保護者の皆様からいただいたご厚情、地域の皆様の温かさを感じた１年となりました。

本校自慢の生徒たちと先生方です。校長として、「３歩進んで２歩下がる、その次の１歩、そしてまた次の精一杯の１歩」を大事にしてまいります。

令和７年も、変わらぬご厚情を賜りますよう、引き続きよろしくお願いいたします。